

終わりの始まり

「特集1」地域・学校・家庭の連携から 学力向上アドバイザー会議
「特集2」国吉康雄に出会うまちで「祭りを終えて」国吉康雄作品模写プロジェクトについて



地域・学校・家庭の連携から

学力向上アドバイザー会議

岡山県の全国学力・学習状況調査の結果が依然として厳しい状況にあることから、福武教育文化振興財団では今後の助成事業が岡山県の教育振興により役立つためにはどうあるべきかについて助言をいただく「学力向上アドバイザー」を県内有識者の方々をお願いしています。今年の学力向上アドバイザー会議では、昨年に引き続き岡山県の学力向上方策について多様な視点からのご意見をいただきました。

学力向上アドバイザー

- ◆ 小山悦司氏（倉敷芸術科学大学大学院／教授）
- ◆ 村上尚徳氏（環太平洋大学／教授）
- ◆ 畠平泰彦氏（岡山商工会議所／理事・企画振興部長）
- ◆ 影山美幸氏（山陽新聞社／論説委員）

村上—全国学力・学習状況調査など、順位があるものは取扱いが難しい。教育現場では順位を上げることが第一目標になってくるので自由さがなくなっていく恐れがある。一方で、今求められている学力を理解し高めるために、もっと調査問題を分析して研究し、授業改善に生かしても良いのではないかな。

また、学習に向かう姿勢は幼児期から養うことが大切。ひたむきに頑張ることや我慢する心、学ぶことの楽しさやルール規律を守るなど、基礎基本を身につける取り組みに重きを置いても良いのではないだろうか。



村上尚徳氏

影山—実際、幼児期において家庭教育が大事だと漫然と投げかけられても、どうすればよいのか、その手立てがわからない家庭が多いのではないかな。大学と連携した研究で、その具体的な声掛け方法や生活習慣なども示してもらえると家庭でも取り組みやすいと思う。

小山—幼児教育・教育関係に強い大学が多いのが岡山の特性。大学側も地域になくはない大学を目指している。大学と地域の学校が連携する形はとりやすいのではないだろうか。学



校インターンシップなどへの学生の積極的な参加は、学校の活性化とともに岡山県の教育人材の開発や発掘にもつながる。いずれにせよ、学力向上に向けては、長期的なビジョンのもとに、着実に地道な取り組みが求められる。



小山悦司氏

影山—幼児期に重点を置き、それから先（小・中・高）を見越して今ある課題を見つけ、それに向かって幼児期から取り組むといった流れの研究活動を岡山県でできたら良いと思う。

それにはキャリア教育の充実も必要である。

畠平—岡山県内の企業も職業高校からの採用枠を増やしたり、就職後に会社から大学へ通

小山氏 「学校・教育委員会と大学との連携強化が岡山県の強みとなる」

畠平氏 「子どもたちが学力向上へアプローチできる地域づくりを」

えるシステムをとるなど、就職先も多様化している。出口（就職先）の価値観が見えることで学習意欲も向上するのではないだろうか。

村上—幼児期からキャリア教育の視点を取り入れ、子どもたちが将来に向かって夢を持てる環境を整える。そしてそれを徐々に具現化できると良い。地域・学校で新たな取り組みを始める一方、今まで行ってきた教育活動を丁寧に振り返ることも大事ではないだろうか。



影山—学力問題を語るときにテレビ、ゲーム、携帯、スマホの使用実態は切り離せない問題ではないだろうか。その現状を分析し、家庭生活も改善していかなければならない。家で時間をどう使うか、具体的な対策や議論が出れば社会の関心も高まると思う。

畠平—子どもたちがテレビ、ゲームに費やしている時間を振り分けられる研究活動を応援したい。一日イベントに参加したが、次の日からはまたゲーム…では意味がない。公民館で退職職員が補充学習を手伝うような日常的な活動を応援したい。さらに岡山県の歴史・文化・



畠平泰彦氏

人物に知識を有する地域の有識者や機関との連携も積極的に考えられないだろうか。宿題などの問題作成を引き受け現場の先生の負担を軽減することで、県民参加の学力向上に繋がると思う。

小山—確かに郷土の歴史文化を教育の観点から見直して、次代を担う子供たちに郷土を愛する心を育てることが必要。地域や保護者から多くの支持が得られる県民運動的な活動も応援できると良い。

村上—研究活動として取り組んだことが、その後の教育に持続して生かされることが大事。その方法や効果が根付いたときに自走できるものになれば皆で共有できる有意義なものとなる。

畠平—学力向上はもちろん大事だが順位・点数ばかりに目が行って、学力向上の本当の目的であるべき最終的に自分はどうなりたいのか、子どもたちが自分で目標を設定し、目的意識が持てるような環境づくりを忘れていない。

同時に学習に適した街の雰囲気も必要。岡山が「学都」というならば、街の落ち着き、その風情を幼少期から感じられるような街づくり・地域づくりも提案して欲しい。

影山—子どもたちはなぜ学ぶのか。その本質的な問い掛けがなくなっていくのはいけないと思う。

自分が将来何になりたいのか。そこを目指してどんな学びが必要なのかを気づかせなければならぬ。財団のいう学力向上の目的は子どもの将来を見据えたものであってほしい。



影山美幸氏

小山—学力向上に向けては、時代を超えて普遍的に重要とされる幼少期の教育、基本的生活習慣の確立、夢や志を育てるキャリア教育、郷土愛の育成、学校・家庭・地域の連携などに重点をおいた助成のあり方が望まれるのではなかろうか。

村上氏 「幼児期から夢を持てる環境を」

影山氏 「学力向上の目的は子どもの将来を

見据えたものであってほしい」

国吉康雄に出会うまちで

出石地区出身の国際的画家・国吉康雄を評価し、理解を深め、理想的な出会いの場となることを目的に、国吉康雄を顕彰する活動「出石国吉プロジェクト」が地元住民を中心に展開されています。その一環として10月5(土)から11月4日(月・祝)の間、国吉川柳&かるた大会、親子を対象にした国吉作品で遊ぶワークショップ、国吉対話型鑑賞会、

大学生たちによる国吉康雄作品模写プロジェクト、講演会、シンポジウムなど画家とその作品に特化した体感型のアートイベント「国吉祭」が出石町界隈で開催されました。

地域住民と共に「国吉祭」を企画・運営した才士真司氏と、国吉康雄作品模写プロジェクト代表 諏訪敦氏(広島市立大学准教授)から地域の変化や成果について寄稿いただきました。



「祭りを終えて」

才士真司 / 国吉祭ディレクター

“国吉祭2013”は、岡山県、岡山市などの様々な支援と国吉の生誕地である出石の住民と店主の方たちの好意と熱意によって、10月5日から11月4日まで行われました。

私が“国吉祭”という言葉が最初に口にしたのは今年の春。その着想の始まりは、「もったいない」という言葉からでした。

例えば、アメリカの研究者が、2015年にアメリカのスミソニアンで開催される国吉の回顧展の準備のために岡山を訪れました。それは、世界一と言われる作品と遺品などの資料で構成される充実したコレクションが岡山に存在するからです、岡山の人ほとんどがこのことを知らない。スミソニアンで回顧展があることも、その意味も。

私は直島での国吉展の演出と照明設計を担当したことで、国吉の絵の本当の美しさと作品の持つメッセージ性に、より惹かれることになったのですが、これらのことを伝えるためにも、誰もがもっと簡単に、国吉にアクセスできるシステムが必要なのではと考えるようになっていました。そして、岡山の国吉コレクションを、教育や福祉、観光や事業に活用し、市民が国吉をシェアすることで、この街の人々の営みにいい変化を促せないだろうかという思いに至ります。

出石での国吉勉強会の発足に始まったプロジェクトは、模写や、岡山市の国吉康雄プロモーションドラマの制作へと繋がり、“国吉祭2013”は、これらの“国吉をシェアしよう”という試みの発表の場となりました。

300人が訪れたシンポジウムとドラマの上映会。出石の方が親子で参加くださったワークショップや旅行者の飛び入りもあった国吉作品対話型鑑賞会。1800人もの方に鑑賞いただいた国吉模写作品。取り上げたメディアは約30。

今、出石の方の中から、店の壁を国吉の絵にしたい。顕彰の碑の周りを掃除しよう。記念館を作りたい。次の勉強会はいつ？国吉祭を継続させるためにも、事業化を考えなければという声がかげだしました。変化の兆しを感じます。国吉を見に、県外から出石に来たという方もいらっしゃいました。

“国吉祭2014”は、“国吉のシェア”を発展、拡張させ、“国吉を活用する岡山”を目標に、より多くの方の賛同を得て、仕掛けていと考えています。

才士真司 ——— Shinji Saito

兵庫県出身。大阪芸術大学卒業後、NPO法人映画美学校に入学。岩井俊二監督作品『リリィ・シュシュのすべて』に参加。以降、映画製作に携わるようになる。他、ラジオ番組MC、講演活動、大学、専門学校講師、イベントのオーガナイザーなども行っている。2013年、直島で開催された国吉康雄展で展示演出したことを切っ掛けに、国吉祭2013のディレクターを務める。

「国吉康雄作品模写プロジェクトについて」

諏訪敦 / 画家・広島市立大学芸術学部准教授

国内において稀な機会

一般的に美術教育として国内の学生が行う模写は、拡大した印刷物や過去の修復記録と、指導者の知識などに依存したものが殆どであると思います。今回のプロジェクトにおいて特徴的であったことは、福武教育文化振興財団理事長である福武総一郎氏の御厚意で、代表作にあたる「もの思う女」と「ミスター・エース」を貸していただいて、真横に置きながら長期間にわたり作業することが許されたことです。これは国内においては本当に稀な機会であったことを強調したいと思います。

デジタルデータと油彩画

日進月歩の高精細デジタルデータ由来の映像や印刷物は、形態の正確な転写には有効で、他にも拡大や光線の種類を変えた各種映像からは、肉眼で確認できない情報も得られますが、油彩画には印刷では読み取ることが難しい情報が含まれています。ひとつは鑑賞者に対して奥行きの方角、例えるなら薄い色ガラスを何層も重ねたものの上からのぞき観るような感覚でしょうか。それは油絵具の透明性の理解に基づく重層構造で得られる体験なのですが、その光学的複雑さを、横方向の色彩配置による再現物である印刷では読み取ることはできません。

更に油絵具はその可塑性を利用した厚みやマチエール(作品が持つ肌合い)が大きく絵画の存在感に寄与しています。このように実物を見る価値は油絵の場合特に高いものなのです。

模写からみてきたもの

国吉は油絵の技法を弱冠17歳で渡米して以降、ニューヨークのアート・スチューデント・リーグなどで体得しており、即興的で自由な筆使いとは対照的に、画面の構成は厳密で、下層塗りと上層塗りの色彩による重層の響き合いを演出し、深く、美しい画面を実現しています。その描画の順序と手法を推理するために、学生たちは本物を毎日実見し、描画サンプルの制作による体験を重ねあわせて、国吉の色彩へとじり寄ってゆきました。本物に対峙して若い学生たちが取り組んだ格闘の日々の成果として、これらの模写作品を御理解いただければ幸いです。加えて国吉の経験した苦難、そして希求したであろう、芸術家としての自由の問題は、過去の成功した画家の記憶にとどまらず、今日的にも重要なものを含んでいると私は考えます。



写真提供：諏訪敦

国吉康雄作品模写プロジェクト

当プロジェクトは、広島市立大学芸術学部の諏訪敦准教授の技術指導のもと、9月2日～16日の間、同芸術学部美術学科2年生の喜田実可子さん、芸術学研究科(大学院)1年の佐藤麗生君による、模写制作が実行されました。当時の国吉作品に使用されたキャンバスや絵の具などの素材や技術、時代背景を調査しながら、模写という手段で学習を試みました。



アトリエで制作中の国吉(1943年頃) 福武コレクション蔵



写真提供：才士真司



演劇の力とは何か。

— 維新派公演「MAREBITO」を鑑賞して

伊藤謙介／京セラ顧問

演劇とは私たちの忘れ去ったもの、あるいは記憶のひだの奥にひっそりと息をこらし身を潜めている何者かに、まぶしい光を照射し、眼前に引きずり出して、正体を暴き、未来を問い詰めることではないだろうか。

劇団維新派の「MAREBITO」の客人(まれびと)となった。瀬戸内国際芸術祭2013秋会期のメインイベントの一つとして、岡山市沖に浮かぶ犬島で開催された野外劇を見る機会を得、長年の思いがかなった。

会場へ向かう途上、銅精練所跡の黒く大きなレンガ造りの煙突が残照に包まれ、異様なたたずまいを見せていた。否が応でも、これから始まる舞台への期待感が高まる。

海水浴場の砂浜には「海の学校」を模した、巨大な特設舞台が設けられ、やがて幕が切っ

て落とされた。
----白い帽子、白いシャツ、白い半ズボンの生徒たち。呪文を唱えながら隊列を組み、あるいは椅子に座り、奇妙な動作を繰り返す。暮れなずむ海辺の景色の中を、潮風に乗って、声明のようなつぶやく声が流れていく。鳥影は次第に海の闇に消えていき、遠くで漁火の灯が点滅を始める----

観劇の日から早や一カ月が過ぎた。今もどこからともなく、白塗りの少年や少女たちの「オギ、オギ、オギシマ。ミエル、ミエナイ…」と絶え間なく繰り返す、呪文のような台詞が、体の奥底から湧いて出てくる。

演じられたのは、海に生きた人類の悠久の歴史なのか。海にまつわる膨大な生と死の系譜、それは血みどろの戦いを繰り返した古代の国々から現代の特攻隊にまで及ぶ。そんな歴史を見つめてきた海が、瀬戸の砂浜に黒い血の波となって打ち寄せる。

私たちは、無数の人々の重層された歴史の中を生きる。かつて青森の恐山で見た、死者の魂を呼ぶイタコの声と、維新派の俳優たちがつぶやく呪文が見事に重なりあった。



Photo by ; Keita Sugiura

「MAREBITO」

- 構成／松本雄吉 ● 音楽／内橋和久
- 会場／犬島
- 公演／2013.10.5～10.14

伊藤謙介 ——— Kensuke Ito

1937年岡山県高梁市成羽町生まれ。日本を代表する企業のトップとして確立した人生哲学や企業理念と共に、社会における文化芸術の重要性、ふるさとや地域文化の大切さを伝えている。2011年(第12回)福武文化賞。

約107万人を越える来場者でにぎわった瀬戸内国際芸術祭2013。「こえび隊」の斉藤牧枝さんは、岡山の玄関口・宇野港を中心に、どんなときでもお客様を笑顔で迎え芸術祭の運営を支えてきました。「こえび隊として島々に渡るお客様とふれあい、私にもできることがあるという喜びを感じることができたんです」と答えてくれました。斉藤さんから瀬戸内国際芸術祭2013を終えて感じたことを寄稿いただきました。



写真提供：こえび隊

「新たな可能性も開拓していきたい」

斉藤牧枝／こえび隊

3月20日から始まり、春、夏、秋と会期を分けて開催した総計108日間に及ぶ瀬戸内国際芸術祭2013が11月4日に閉幕しました。

会期中は、多くの方が宇野港から島々に渡る様子を見続けていました。私自身は島に行くことはありませんでしたが、島に渡ったこえび隊や、芸術祭を巡るお客様の話を聴くことで、活気づく島々の様子も知ることができました。

宇野港は、春会期は比較的落ち着いた開幕という印象でしたが、夏会期には街中写真プロジェクトも始まりました。秋会期にはこえび隊が、越後妻有大地の芸術祭ボランティア・サポーター「こへび隊」や地元の方々と一緒に作り上げた「宇高連絡船・機関車わらアート号」の登場も手伝って、会期を重ねるごとに芸術祭の雰囲気が色濃くなっていったように思います。

私がこえび隊の事務局スタッフとなったのは、島々に魅せられたのはもちろんのこと、2010年の芸術祭でこえび隊の活動に参加した際、こえび隊が香川、

岡山の県境を越え、のびのびと瀬戸内で活動するには、高松港だけでなく、岡山側にも拠点が必要と思ったためでもあります。集まる港や、活動する島が違って、こえび隊が心一つにして活動することができれば、芸術祭の魅力も増し、島や港の活力にもなると思えたのです。

今回の芸術祭でも、岡山県内外を問わず各地から多くのこえび隊が宇野港に集まり、苦労や楽しみを分かちあいながら活動しました。これは島々への玄関口である宇野港にとっても、公表された来場者数などでは推し量ることのできない大きな意味があるものです。

芸術祭は終わりましたが、こえび隊は残された作品の運営や、島々の行事に参加するなど、活動を続けます。島々や人々とのつながりを保つという意味では、3年後の芸術祭への準備はもう始まっているのです。私たちこえび隊はこれからも地道な活動を通して、島についての理解を深め、新しい仲間との出会いを楽しみ、新たな可能性も開拓していきたいと思っています。



斉藤牧枝 ——— Makie Saito

横浜市出身。2009年から2年間、人事交流制度で横浜市から玉野市へ派遣。2010年に18年勤めた横浜市役所を退職し宇野に移住。現在NPO法人「瀬戸内こえびネットワーク」事務局専任スタッフとして活躍中。

杉浦慶太

私は田舎が嫌いでした。思春期只中の90年代、時代の最先端であるアートの中心は東京であり、岡山の中でもさらに辺鄙な所に住んでいた私は、雑誌やテレビを横目に劣等感にまみれ成長してきました。それもこれもすべてダサイ田舎のせいです。

いまではさすがに大人になりましたが、まだ心の奥に東京に対するコンプレックスが燻っているのを認めざるを得ません。先日、私は犬島で行われる維新派の公演の撮影に出かけました。初めて見る舞台は抽象化された中にも普遍的なメッセージが織り込まれ、役者の演技、舞台装置や照明、音響など全てが混ざり合いまるで魔法のようなひと時でした。内容の素晴らしさは勿論のこと、それをより際立たせていたのは犬島の自然です。舞台の進行に合わせて陽が少しずつ傾き始め、山際の空を焼けるように染めた後、残照のやわらかな光が名残惜しそうに徐々に薄くなり、やがて夜に侵食されていく……。

途中、自然と作品があまりにも分かち難く関係していたため、私はどちらに感動しているのか判別することができませんでした。

瀬戸内国際芸術祭は閉幕しましたが、多くの表現者が私たちに「自然の中にアートの可能性がある」ということを示唆してくれました。

もし、今の私が17歳の私に会えるのならそれを教えて青春を軌道修正してやりたい。しかし、信じてはもらえないでしょう。彼が愚かで生意気なことは私が一番よく知っているのです……。

すぎうらけいた / 写真家 1980年岡山県生まれ、津山市在住。2008年「GEISAI #11」銅賞、「[氏賞]」大賞 / 2009年「Daydream」(MaxProtech Gallery / ニューヨーク) / 2010年福武文化奨励賞、「ink jet」(CASHI / 東京)、「杉浦慶太展—農村の意匠—」(奈義町現代美術館 / 岡山)

Editor's Comments

▼瀬戸内国際芸術祭2013では大変お世話になりました。おかげさまで、国内はもとより、世界中から107万人を超える多くの皆様に瀬戸内を訪れていただき、盛会、成功裏のうちに幕を閉じることができました。ご支援、ご来場をいただきましたすべての皆様に心より感謝と御礼を申し上げます。

▼「国吉康雄」。正直、これまでその名前を聞いたことはありませんでした。いや、もしどこかで聞いていたとしても、芸術に疎い私の記憶の中にはありませんでした。出会いは今年、直島ベネッセハウスでの展覧会。「う～ん、これは一体？」が率直な感想。その後、犬島での維新派の演劇公演、瀬戸内の島々での芸術作品との出会い、国吉祭シンポジウムなど様々なアートイベントを体験する中で「ミスター・エース」の視線の先が気になりだしたこの頃です。「自分なりに感じる。」それでいいと。

▼県下の児童生徒の学力は、毎年、文部科学省が行っている全国学力学習状況調査の結果ではあまり芳しいものではありません。財団ではこの状況が少しでも改善できればと、有識者の方からご意見、提言をいただき、学力向上のいろいろな取り組みに対して助成を行っています。また、校長先生から現場の状況をお聞きしたり、教室で授業を見せていただいたり、授業後の検討会に参加させていただいたりすることもしばしばあります。そんな時よく感じるのは先生方の「焦燥感」です。これだけ一生懸命やっているのになかなかよい結果につながらないという「もどかしさ感」を感じます。これが「あきらめ感」にならないことを願うばかりです。先生方の意欲と努力と一生懸命さは絶対に子どもの将来につながるものです。信念と自信と余裕で、焦らず、あきらめず子どもたちを導き、育ててもらいたいと思います。「教育は100年の計」なのです。(財団・H)

季刊

不易

F U E K I vol.53 2014.1.25

編集・発行:

公益財団法人 福武教育文化振興財団

〒700-0807 岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3FTEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190
URL <http://www.fukutake.or.jp/>
E-mail eczaidan@fukutake.or.jp制作:
株式会社 吉備人
デザイン:
田中雄一郎(QUA DESIGN style)
印刷:
広和印刷株式会社公益
財団法人

人づくり、地域づくりを応援します

福武教育文化振興財団